

戦略的情報通信研究開発推進事業(SCOPE)
終了評価結果(令和5年度終了課題)

プログラム名:独創的な人向け特別枠

事業名		研究代表者氏名 (所属)	
異能(inno)vation		福田 正 (株式会社角川アスキー総合研究所)	
研究開発期間	平成26年度～令和5年度	委託額	1,736,393 千円

評価点					
①事業運営と研究成果の広報活動の実施実績	②継続的な研究者の発掘と支援の実施実績	③継続的なスーパーバイザー支援の実施実績	④異能 vation の民間への移行	⑤費用対効果の検証	総合評価合計 (25 点満点)
4.7	4.7	4.3	4.7	5	23.4

総評	
評価委員 I	施策としての独自性の高いプログラムであったにもかかわらず、コンセプトを維持して、効果的、効率的な実装、事業運営を実現したと高く評価できる。日本の独創性重視の施策の先駆けとなるとよい。
評価委員 II	本プログラムは 10 年間で大きく成長し、性別を問わず若い世代を中心に挑戦する勇気を与えるなど素晴らしい実績をあげている。イノベーション施策のモデルとなる取り組みであったと考えている。
評価委員 III	ChatGPT に代表される LLM、量子コンピューター、核融合炉の登場といった新しい技術の展開が始まろうとしているときに、きっと、新時代にふさわしい新しいプログラムが開始されることを期待したい。

①事業運営と研究成果の広報活動の実施実績	
評価委員 I	当初のコンセプトが斬新なものであったにもかかわらず、その実装に関して、多少のチャレンジも含めていろいろと展開していただいた点は、高く評価できる。このプロジェクトで伝えるべき考え方は、旧来の日本の考え方とは違うので、その展開には苦労があったと思われるが、結果として多くの方々の賛同を得たことは実績として評価できる。そのための広報活動も丁寧で、かつ多角的なもので、従来のプログラムとは一線を画す秀逸なものであると考える。採択された方ばかりでなく、応募した方、応募しようとした方々に、社会の評価構造の転換の道もあることを十分認識させることができたと考えられる。
評価委員 II	応募件数の顕著な増加、女性の応募比率の高さ、若い世代の応募比率の増大などのエビデンスを考慮すると、国内でのチャレンジする雰囲気醸成について、大きな成功を収めたと考えられる。また、協力協賛企業グループに海外企業 53 社が参加していること、外国からの応募がかなりあったことを考えると、国外においても想定以上の雰囲気醸成に成功したと評価される。
評価委員 III	2014 年度の応募は 710 件(「破壊的な挑戦部門」のみ)からスタートし、「破壊的な挑戦部門」における最終応募年となる 2022 年度の応募件数は「破壊的な挑戦部門」で 1,717 件、「ジェネレーションアワード部門」では 19,679 件であり、合計 21,396 件となった。この数字が物語るように、10 年間の中で行ってきた「失敗を恐れずにチャレンジする」という「雰囲気の醸成」は達成できたと評価できる。 中でも特筆すべきは、女性の応募者の増加、10代の応募者の増加、応募者の年齢層の幅の広さ、と言った、応募者の多様性にも、「雰囲気の醸成」の達成の別の側面として、評価できる。

②継続的な研究者の発掘と支援の実施実績

評価委員Ⅰ	「世界を変える奇想天外な研究者」の程度にもよるが、すべての研究者がそうであったとは言いがたいが、少なくともそのような研究者が含まれていたこと間違いなく、他のプログラムにない重要な成果だったと高く評価できる。予算的な制約もあり、支援が十分であったかは、検証する必要があるかもしれないが、民間を巻き込んで、実装までの道筋を設計したことは、事業運営者としては、十分な成果であると考えられる。
評価委員Ⅱ	「0 to 1 チャレンジ」と「破壊的チャレンジ」の2段階プロセスは、チャレンジする研究者に自ら成長するモチベーションを付与するのに有効であったと高く評価できる。また、一般に研究者が得意ではない経理や知財の処理などを専門家がサポートした点は、チャレンジャー支援としては的確であった。さらに、チャレンジャー同士がお互いに知り合う機会であるイベント開催など、研究者のネットワークを広げる取り組みも研究者の成長に有効であったと考えられる。
評価委員Ⅲ	当初の最長4カ月／支援額最大 100 万円で思う存分試行錯誤を繰り返すことができる「0 to 1 チャレンジ」を出発点とし、その後 2020 年度からは、ゴールに突き進む「破壊的チャレンジ」の2段階のプロセスが導入され、支援期間と支援額は(合わせて)最長 1 年、最大 300 万円とされた。 144 人が破壊的な挑戦部門で採択され、更に、そのうち 120 名がスーパーバイザーに卒業が認定され、異能βとされた。 このように、支援の仕組みを改良・拡大することによって、破壊的な挑戦部門チャレンジャーとして滞りなく支援し、自ら成長する機会の提供は、行われたと、評価できる。

③継続的なスーパーバイザー支援の実施実績

評価委員Ⅰ	スーパーバイザーの人選に関しては、多少の疑問がないわけではないが、全体としては、分野的にも、考え方としても、多彩な人材をそろえることができ、そのことがプログラムに有効に働いたと認識できる。スーパーバイザー等に過度な負担があったかどうか、十分な支援があったかどうかは、スーパーバイザーに聞くべきであるが、プログラムの設計としては、両者とも十分であったように見受けられる。スーパーバイザーの活動は、このプログラムの運営を支えている重要な活動であったと高く評価できる。
評価委員Ⅱ	素晴らしいスーパーバイザーの割合が高かったことを大いに評価したい。彼らの負担は極めて大きかったはずであるが、楽しみつつ評価されていた。スーパーバイザーのコミュニティ形成にも成功したと考えられる。このように、人選と雰囲気づくりに成功したことが、奇想天外な研究者を発掘しやすい環境構築に貢献している。また、評価ツールやオンラインの活用は、彼らの負担軽減に貢献したものと考えられる。
評価委員Ⅲ	「破壊的な挑戦部門」の候補者の評価を行う、様々な分野の第一線で活躍する専門家で構成されたスーパーバイザーが、人選されてきており、その上で、多忙なスーパーバイザーをサポートするために、そのアシスタントとなるスーパーバイザーアソシエイトを招聘することによって、スーパーバイザーの負担を軽減する配慮がされた来たことが、評価される。

④異能 vation の民間への移行	
評価委員 I	公共的なプログラムとしては多少配慮に欠ける部分も見受けられたが、全体としては、プログラムの中で民間を巻き込んだ形が取れたのは大きな成果である。その中で、自立促進の道も設定されているので、枠組みとしては十分であると考えられる。この異能 vation を受け継ぐ仕組みも考慮されているが、異能 vation の理念や歴史をうまく継承して、民間のみで自立的な体制にしていきたい。引き継いだ先の評価は、時期尚早である。
評価委員 II	異能 β の技術、情報を地球規模に発信するという異能マスタース等の支援は適切であった。また、「ジェネレーションアワード部門」の創設は民間企業の巻き込みに有効で、本プログラムを民間のみで実施する可能性を高める上で大きな役割を果たしたことを大いに評価したい。まさに、イノベティブな取り組みであった。民間ベースで本プログラムを継続されるようであるが、ぜひこの成功した取り組みを民間ベースで継続し、さらに発展させてほしい。
評価委員 III	本プログラムに賛同した 250 団体を中心とした「ジェネレーションアワード部門」の取り組みを中心に、民間企業が課題と賞金を提供する「課題解決型コンテスト」として、「異能 vation グランドチャレンジ」も実施することによって、賛同企業による課題は 14 に上り、賞金総額は 1 億 653 万円に昇った。 この他に、協力協賛企業グループに向けては、「ジェネレーションアワード部門」では応募される優秀なアイデアに対して、社会実装に向けた機会の創出として、マッチングプログラムを用意している。参加する企業は、応募された全アイデアを審査・評価する中で、自社事業での採用や協業先としての可能性を検討することができるようになっている。協力協賛企業グループは、現在 225 団体となっており、海外企業も 53 社が参加している。これは 2021 年度より、タイ国においても異能 vation プログラムの周知、挑戦者の募集を行った中で、現地企業と連携したことにより、参画につながっている。

⑤費用対効果の検証	
評価委員 I	一部の予算の使い道に効果があったかどうか疑問がわくところもないわけではないが、全体としては、途中で予算削減などがあったにもかかわらず、十分な成果が出たと認められる。全体の費用からすれば、社会に新しいメッセージが出せて、独創性に対する新たなプログラムができたことが高く評価でき、その意味を加味すると費用対効果は特筆に値する。このプログラムにより、総務省、あるいは他省庁がこのような考え方の施策の意義を理解してもらえとなれば、更なる効果として高く評価できる。
評価委員 II	10 年間で 17 億円余の支出でプログラムをブランド化し、全国各地に異能 vation ネットワーク拠点を構築し、多くの協力協賛企業の輪を構築し、120 名の異能 β を生んだことを考慮すると、極めて費用対効果が高かったプログラムである。異能 vation という通常の行政事務とは全く異なる業務に挑戦しそのプログラムを的確に管理した行政関係者、委託された以上の挑戦を行った株式会社角川アスキー総合研究所の関係者に敬意を表したい。
評価委員 III	実施機関である株式会社角川アスキー総合研究所におかれては、予算の枠組みを守りながら、きつと、持ち出しをものともせず、実施していただき、費用対効果の適切性を維持していただいたと思われ、感謝いたします。